

## 「神の作品として生きる」エペソ2章1-10節

今朝開かれております聖書の箇所には罪人であった私たちがどのようにしてその救いにあずかることができたのか、また一体何のために救われたのかキリスト教信仰の神髄、本質について記されています。そしてパウロはその結論として10節で「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えて下さいました。」と語っています。ここでパウロは私たちがキリストによって救われるというのはキリストによって新しく造られることだと語っています。恐らくパウロがここで私たちの罪からの救いを「新しく造られること」と表現した時、人間が創造の初めに神によって造られたことと対比して語っているのではないかと思います。それは、このキリスト・イエスにある新しい創造は天地万物の創造に匹敵するような重要な出来事であるからです。

それでは私たちは何のために新しく造られる必要があったのでしょうか。それは言うまでもなく、私たちが「神の作品」として、「良い行いに歩むため」でありました。

それでは、ここで語られる「良い行い」とは何でしょうか。それはいわゆる道徳的な良いことではありません。道徳的に良いことならばクリスチャンでない人でも行っているからです。ここで語られる良い行いとは神の目から見た良い行いであり、神の御心にかなったことであり、神と共に生きることです。ですから、私たちクリスチャンの良い行いは、「神との正しい関係、正しいあり方」から生まれてくるものであります。それゆえ、私たち人間の「良い行い」は神との正しい関係、あり方と決して切り離して考えることはできないのです。

ところが、私たち人間は創造の初めに、神さまの戒めを破り、神さまとの愛と信頼関係を自ら壊してしまったのです。聖書はそれを罪と呼んでいます。罪とは神に背き、神を無視し、神の御心を否定し、自分勝手に生きることです。罪とは的外れを意味しています。それは本来のあり方からずれてしまい、的外れな存在になってしまったということです。そして私たち人間は的外れな存在になってしまったので的外れなことをするようになったのです。パウロは私たちのそのような状態を1節で死んでいたと表現しています。ここには神から離れて生きている者の霊的な状態が示されています。それは霊的に死んでいる状態です。つまり、私たちの霊的状态はそれほど深刻な状況なのです。しかし私たちの多くはその深刻さに気づいていないのです。私たちクリスチャンがこの世にあって生きるということは、自分の中にある罪との戦いもさることながら、悪魔や悪霊の働きに対して対抗して生きることです。しかもパウロはここで「私たちもみな」と語り、自分たちユダヤ人もまたこの罪の支配のもとにあると語っています。今日の時代、私たち人類はまさに、神を否定し、背きと罪の中に死んでいる人生を歩んでいるのです。サタンや悪霊の支配に従った、自分の肉の欲のままに生きる人生を歩み、その中で罪に苦しみ、必死でもがいているのです。

しかしパウロは、私たちはそのような背きと罪の中に死んでいた者であります、そのような状態からあわれみ豊かな神は私たちを救って下さったのだと語るのです。4-5節

そしてその救いは神の大きな愛の故に与えられました。この神の愛は愛される価値のない者を愛する愛だと言われています。しかし私たちはこの神の愛が中々わからないのです。それでは私たちは神さまが自分のことを愛していることをどのようにして知ることができるでしょうか。神さまもまた私たち人類にその愛を伝えるためにただ言葉を通してだけでなく、イエス・キリストと言う最も大切なひとり子をお与えになり、私たちの罪のために身代わりに十字架に架けるといふ大きな犠牲を通してその神の愛を示されました。

それではこのイエス・キリストの救いに、私たちはどのようにしてあずかることができるのでしょうか。それはこのイエス・キリストの十字架の死が私たちの罪の贖いのためであると私たちが信仰をもってイエス・キリストを信じ、受け入れる時に私たちのものとなるのです。(ヨハネ 1:12) このようにして、私たちがイエスを心の中に受け入れる時に、罪の中に死んでいた私たちが神の子どもとされると言うのです。イエスはご自分をキリストとして信じるのが御霊によって新しく生まれることであり、神の国に入ることになるのだと言うのです。しかもパウロはここでこのようなすばらしい救いが恵みのゆえに無代価で、神の賜物として私たちに与えられたのだと語ります。神の賜物とは神のプレゼントということです。私たちが誰かから贈り物もらった時、「それは本当にご親切に。ところでおいくらですか。」と言うのでしょうか。贈り物にふさわしい応答は「ありがとう」ということばです。神の救いは賜物なので、私たちは感謝と賛美と喜びをもって神に応答するべきであります。私たちは神の豊かな恵みによって救われたのであって、私たちの努力や能力、奉仕の結果与えられたものではありません。救いが「神の恵み」のゆえに「信仰」によって与えられることをした宣言したパウロは、ここではさらに「行いによるものではありません。」と念を押しています。しかもそれは「だれも誇るためのないためです」とその理由まで語られています。確かにもしも救いが私たちのそれぞれの行いによって与えられるとしたら、神ではなく自分を誇るようになるでしょう。それだけでなく、もしも私たちの行いによって救いがもたらされるとしたら、どの程度の行いを、どれくらい行ったら救われるのかということになり、救いの確信を得ることができなくなります。行いには際限がないからです。またもしも救いが行いによって得られるとした、人との比較が始まります。そして人との比較は人の目、人の評価を求める偽善的な信仰をもたらすのです。今日は宗教改革記念日ですが、実は1517年10月31日に宗教改革を始めたマルチン・ルターもまたローマ・カトリック教会の「善行によって義と認められる」という教えに対して、人が救われるのは信仰のみによるのだという信仰義認の教えを前面に打ち出してローマ・カトリック教会と戦ったのでした。ところが、ローマ・カトリック教会側から、ルターの言うようなことがまかり通ったらこの世は悪人ばかりになってしまうだろうと批判されました。それに対してルターはあなたがたがそのようなことを言うのはイエス・キリストの救いが全く分かっていないからだとして反論しました。

それはイエス・キリストを信じ、救われるとは神のみこころを行う者として救われることだからであります。つまり私たちクリスチャンは良い行いに歩むためにキリスト・イエスにあって新しく造られた神の作品であるのです。そしてもしも、私たちクリスチャンが神によって造られた作品であるならば、それは製作者である神のために用いられ、神の栄光を現わすために造られたということです。私たちはイエス・キリストを信じて救われて終わりではありません。むしろ救われた後どう生きるかこそ大事なことです。パウロは私たちが救われた目的について7節で、「キリスト・イエスにあって私たちに与えられた慈愛によって、この限りない豊かな恵みを、来るべき世々に示すためでした。」と語ります。神さまはこのイエス・キリストを通して与えられた救いを通して豊かな恵みを来るべき世々に示そうとされたと言うのです。それではどのようにして、このイエス・キリストの救いを世に対して示そうとされたのでしょうか。それは私たちクリスチャンが神によって造られた神の作品として、良い行いに歩むことによってイエス・キリストの救いのすばらしさ、神の恵みが証しされるのです。それは限りない豊かな神の恵みのゆえに、いつも神を喜び、絶えず神に祈り、どんなことでも神に感謝して生きる者になったということでもあります。神はそのような新しいキリストにある救いを、新しい生き方を私たちのためにあらかじめ備えて下さったのです。私たちも神の作品として、神のものとして生きる人生を歩ませていただきたいものです。